

【かわとはきものNo.172についての謝罪文】

日頃より、東京都立皮革技術センター台東支所の事業に、ご理解・ご協力を頂きまして、ありがとうございます。

この度は、2015年6月30日発行の「かわとはきものNo.172」の記事「靴の歴史散歩117」（稲川實氏著）におきまして、引用させていただいた冊子「明日を拓く」（編集：「明日を拓く」編集委員会、発行：東京部落解放研究会）の写真を、執筆者の稲川實氏並びに「明日を拓く」発行者の方々に、許可を得ることなく副題（「木下川地区のあゆみ」）を削除してしまった写真を掲載してしまいました。

読者の皆様をはじめ、執筆者、発行者の東京部落解放研究会（現：東日本部落解放研究所）の方々に、多大なるご迷惑をおかけしたことについて、深くお詫び申し上げるとともに、以下に、訂正記事を掲載させていただきます。

今後とも、東京都立皮革技術センター台東支所の事業、及び当冊子「かわとはきもの」へのご支援をお願い申し上げます。

東京都立皮革技術センター台東支所

靴の歴史散歩 ①17

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

弾慎平の製革工場「東京皮革製造所」が、東京府南葛飾郡大木村下木下川（現・墨田区東墨田2丁目の内）だったので、その木下川地区に行けば、弾慎平の足跡ぐらひは、安易に辿れるものと思っていた。

以前から承知していた東墨田会館の「産業・教育資料室きねかわ」に元木下川小学校教師の岩田明夫先生を訪ねることにした。

昭和6年以降の情報がまったくないので、当時の町内会の名簿か、同業者名簿のようなものが遺っていれば、弾慎平の名も見出せると考えたが、どうも甘かったようである。土地に詳しいその先生も、「それらしきものは皆無です」と無情なご返事であった。唯一お見せ出来るとすれば『明日を拓く』（東京部落解放研究会 1994）の特集号だけであるといつて、閲覧させていただいた。（写真参照）

製革、製靴に関係のない内容で、少々残念だが「弾慎平の法華経の経文」という項があったので、抜き書きさせていただく。

「明治末年から、弾慎平という人物が、木下川で皮革工場を開いた。弾慎平は最後の弾左衛門・直樹の四男に当たり、1879年12月の生まれであった。工場開設以前は亀岡町にいたと思われるが、その当時、皮革業に関わっていたかどうかは明らかでない。

その弾慎平さんのところに、直接出入りしていた人物から、今回話を聞くことができた川田鶴太郎氏らである。川田氏は1917年、十四歳の時から戦争直後の1946年まで、木下川で皮革業に関わったが、若者当

時、同年代の五人でよく一緒に行動したことから、通称五人組と呼ばれていた。

中略……そのうち、最も興味深いのは、弾左衛門家に伝えられる『日蓮上人真筆の法華経の経文』の話である。それは弾慎平のところにあり、五人は実際に手に取って見たことがあるというのである。……十月の大仕切りに弾慎平は池上本門寺に参内し、これに五人組は2、3度ついて行ったということである。酒を振る舞われ、弾慎平は丁重に奥に通されたという。本門寺の対応からすれば、弾家の経文に価値を認めており、弾慎平はその正当な継承者とみなされていたことがわかる。……」

まだ長々と続くが、皮革には縁のない経文の話なのでこのへんにしておきたい。本来分家であるはずの四男慎平が、弾家の家格を継いでいたようにも読みとれ、たいへん興味あるところである。

